

審査の結果の要旨

氏名 北沢（冨澤）かな

北沢かな氏の「オリエンタリストのインド論」は、近代宗教学の形成の基礎となった西洋の東洋学の他者理解の問題点を、イギリスのインド研究の成立期を例として考察した業績である。

イギリスのインド学の基礎を築いたウィリアム・ジョーンズ（1746-94）は、サンスクリット語に高い文化的価値を見だし、ブラーマンのインドの伝統はアーリア人種の文明として西洋の古代文明と源を同じくし、それに匹敵する価値があると考えた。ジョーンズの構想したインド学は中東研究を取り上げたエドワード・サイードがオリエンタリズムに見た諸特徴と多くを共有しつつも、インドに共感的な思い入れを行う点で大きく異なっている。セム、ハム、ヤペテの系譜を引く諸人種という神話的表象と結びついたこのインド観は、浄・不浄の概念の意義を強調する20世紀のルイ・デュモンに至るまで強い影響力を保持し、インド宗教論の基調を形づくってきた。他方、アレグザンダー・ダウ(1735?-79)に先駆的な表れがありジェイムズ・ミル(1773-1836)が代表するようなアジア的専制論は、インドに停滞と自堕落を見いだすもので、19世紀に強化される進歩史観や宗教進化論と符節を合わせる。北沢氏はこの二つのインド観の系譜をフランソワ・ベルニエ(1620-88)やモンテスキュー(1689-1755)らにまで遡って考察し、その展開の軌跡を明らかにしていく。

北沢氏はこうした二つのインド観の系譜がせめぎあう政治的論争として、インド総督のウォレン・ヘイステイニングズに対する、イギリス議会での弾劾裁判(1786-95)を取り上げる。そこではインドで統治の実務にあたった東インド会社員らが「ネイボブ」（イスラーム貴族の呼称に由来）として批判されるが、「偏見」の意義を説き伝統の価値を称揚したアイルランド出身のエドモンド・パーク(1729-97)はその急先鋒だった。この論争を通して、卓越した「文化」や「法」を強調する「オリエンタリスト」らの宗教文化論的インド理解と、「専制」にこそインドの本質を見るその後の「アングリシスト」的なインド理解との分化と対立の構造が導き出されていく。そしてこの二つの本質論の乖離状況は、インド研究上の大きな課題として現在にまで続くものであることが指摘される。「ヒンドゥーイズム」という概念が成立してくるのもこの時期である。

北沢氏はオリエンタリズムをめぐる諸考察を踏まえ、インドとヨーロッパの双方を見渡しつつ、新たに多くの資料を発掘して問題に切り込んでいる。インド宗教研究という観点から近代宗教研究の成立を反省する試みは先例が少なく、研究水準を大きく引き上げ、宗教学史の理解と宗教学の方法論的自己理解に貢献するところが大きい業績である。よって審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。